



連載エッセイ

西南大生への 提言

東山 彰良



2 回目

「パーティが終わるとき」

大学の四年間は人生で最後の自由な時間だとよく言われますが、このご時勢です、自分から会社を辞める人もいれば、リストラに遭う人もいるし、そもそも就職さえしないような豪傑もいるでしょう。望むと望まざるとにかかわらず、気がつけばまた自由の身になっていたりするものです。

そもそも、自由とは「何者でもない」ということです。その意味で、赤ちゃんより自由な存在はありません。赤ちゃんはやがて言葉話します。それが日本語であれば、その子がいずれ英語でギャングスタ・ラップをやる可能性は著しく減じます。さらに成長して小学校、中学、高校へと進み、なにかスポーツをやるとしましょう。それが野球なら、その子が将来マイケル・ジョーダンの再来と呼ばれる可能性はぐんっと低くなります。で、いよいよ我らが西南学院大学へ入学と相成るわけですが、この時点できみが宇宙飛行士になる可能性は限りなくゼロに近くなります。

よくが言いたいのは、きみがいまこの大ににいるのはいろんな可能性を、それこそ無限の可能性をすててきた結果だということ。それはきみがないうる最高の選択だったのかもしれないし、妥協の結果かもしれないけれど、いずれにせよ人はそうやって生きていくしかありません。大学を四年間つくづくパーティとみなすのも悪くないでしょう。それこそ大学生生活の醍醐味でもあります。酒を飲んで、合コンでハジけて、授業をサボる。だけどパーティを選ぶということは、ほかの可能性をすてることを意味します。そして、このパーティはやがて終わります。

特別な才能を持つ人間はみんな不自由です。イチローは野球選手以外の何者でもない。彼にはピアニストになるという選択肢はないのです。大学時代の自由は、自分で納得できる不自由を手に入れるためにこそあるのだと思います。そうじゃなければ、きみはいつまでも自由で、純真で、何者にもなれません。そんなパーティの終わり方ほど、虚しいものもないでしょう。

東山 彰良 (ひがしやまあきらさん)

profile

1968年台湾生まれ。

西南学院高等学校、

西南学院大学経済学部経済学科を卒業後、

西南学院大学大学院経済学研究所を修了。

第1回「このミステリーがすごい！」

大賞銀賞・読者賞を受賞し、

2003年「逃亡作法」(宝島社)でデビュー。

2009年「路傍」(集英社)で

第11回大蔵春彦賞を受賞。

現在、西日本新聞紙上で

映画「ムム」熱風映劇シネマサンタナを連載中。

最新作は「さよなら的ボリネーション」(徳間書店)近日刊。

